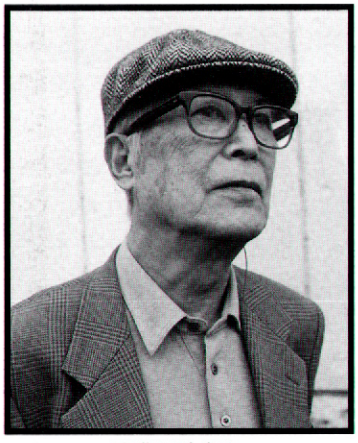
齊藤国治先生をおくる

牧田　貢

齊藤国治先生と東京天文台で特にお近づきになったのは，昭和45年（1970）のメキシコ日食にお供した頃からである．先生は世界の大多数の観測隊がミヤワトランという高地に観測地を定めたのに対して，海岸の小港プエルトエスコンディドを観測条件最適地として選ばれた．当日3月7日は両観測地とも快晴，勝負はアイコであった．

先生のお名前が欧文報告に初めて登場するのは，田中（務）・長沢・齊藤の連名で，三鷹塔望遠鏡で得た黒点スペクトル中に分子を同定したもの（1939）であろう．これは 同時に発表された田中（務）・高木の黒点磁場測定と共に我国観測天体物理学の嚆矢となる世界レベルの研究であり，私はこの存在をアメリカでオランダ人から教えられた．先生に別刷を無心した折に「これは最後の1部だ」と言われて頂戴したように記憶するが，その後のご研究が異なった方向に向かわれたせいか，特に内容についてコメントされなかった．因みに論文の発表された昭和14年は先生ご結婚の年ときいている．

敗戦後の結核闘病期を乗り越えられた後は，戦争中に何回か参加されたことのある日食観測に集中され，太陽活動周期11年を上回る期間にわたってコロナの明るさを測り続けられた．このデータは後世に残るものであろう．先生の解析で私の印象に残っているのは，polar ray の観測から“太陽の極は禿げている”といわれたこと（1965），Saito-Billings (1964)で coronal loop の形を三次元で示して見せたことである．昭和41年（1966）私がパサデナに居たとき，クウェーサーの発見者の一人であるシュミット氏が私のところにやってきて，昔オランダでコロナの偏光観測をしていたのだと自身の古い論文を見せてくれた．“自分は3連望遠鏡を使ったが，Saito は4連で 成果を挙げた”というようなことを言われて，オランダ人の情報調査には改めて驚かされた．ご停年を控えた昭和48年（1973）のアフリカ・モーリタニア日食には10回目の日食観測ということで参加に執念を示されたが，健康上の理由で周囲から思い止まらされた．しかし，50度の炎熱，砂嵐の埃にかすんだ当日のコロナからすれば，結果的に先生にとって良かったと思っている．



齊藤国治先生

1913年	東京に生まれる
1936年	東京大学理学部天文学科卒業 北見地方の皆既日食観測（最初）
1964年	東京大学東京天文台教授に
1973年-75年	日本天文学会理事長
1970年	メキシコ日食観測（最後）
1974年	東京大学東京天文台教授を定年退官 以後「古天文学」を創始する
2003年	2月21日逝去（89歳）

先生はご退官前から我国における天文観測の歴史に興味をもたれ，明治以降の日食・ハレー彗星・金星日面通過等の古記録を調査しておられたが，ご退官後はパソコンを購入されてもっと古い和漢の古記録にある天文現象の検証に向かわれた．「古天文学を拓いた」と自負されていたが，これは先人たちが散発的にやっていた天文学的検証を大々的に実行され，お得意の文筆力をもって結果を広く紹介されたものである．“大学生協で安く買

ラエ皆既日食（1962年）
四連カメラと齊藤先生

うことができた”と中国で出版された中国正史シリーズを楽しそうに見せて下さった．我国・中国・朝鮮等の古典を不自由な眼で丹念に読破された．検証の結果をまとめて発表する楽しみのため「歩くこと」を犠牲にして車椅子の身になられたと聞いている．

ご退官の際に有志でご希望のプレハブ書庫をさしあげた．できたからと呼ばれて行ってみると，書籍の他にダンボール箱がいくつも格納されていた．なんでも小学生の頃からの日記だそうで，中には中学生の時に書いた小説も含まれているという．日頃から「書く」ことを何とも思われない先生だとは思っていたが，びっくり，早い話，私はここまで書いてくるのに何度もつかえている．「刻苦精励」という言葉があるが，先生の場合は「楽しいので精励」しておられる．でなければ長続きする筈がない，というのが私の合点であった．

書くことに限らず，いつでもすることを見つけて，マメにそれを楽しまれた先生であるが，道具を扱うのは苦手で，何でもシッカリと掴まれるクセを持っておられたようである．先生の使われたレンズやフイルターは指紋だらけだったとか，そういえば，メキシコ日食で観測装置の設営や撤収時，監督はされるが手は出されなかった．最初はお年のせいと思っていたのだが，本当は遠慮しておられたらしい．また，時たま，相当な被害者意識に囚われることがあって，そんなことドーンと構えて取り合わなければ良いのにと思うことがあった．怠け者の私にとって向こう側の人に見えた先生が，不謹慎ながら，こちら側の人と思えた次第である．

小学生時代から続けられた「書く」ことは，物事やご自身をすなおに表現する術に磨きをかけられたようである．小惑星「KUNIJI」を贈られたこと，私も加わらせて頂いたお別れの席は悲しみの中にも“和やか”であったこと，は先生のこうして形づくられたお人柄を映したものと思う．ご退官間際に天文台南を流れる野川の改修工事の話があり，野川の歴史を遺すためにそこにかかる何本（10？）かの橋のスケッチを散歩毎にされていた．またご退官直後には東京中の名所旧跡（？）を虱潰しに歩かれ，ご自身を見事にシェイプアップされた．健康上の全てのハンディから解放された今，今度はどんなことを見つけて楽しんでおられるのだろうか，やがて往く身の私，いつの日かお目にかかりたいと思っている．

（大阪学院短大）